令和４年度

# 研究所報 No.36

金沢美術工芸大学美術工芸研究所
〒920-8656　金沢市小立野5-11-1
TEL.(076)262-3519　FAX.(076)262-6594
Eメール: bikoken_g@kanazawa-bidai.ac.jp
https://www.kanazawa-bidai.ac.jp

新キャンパス　鳥瞰パース

## 巻頭言

令和５年度、金沢美術工芸大学は新キャンパスに移転する。本学にとって大きな節目となる事業であり、新校地での開校に向けて教職員一丸となって注力して来た。美術工芸研究所では収蔵品、卒業修了制作の買い上げ作品等の調査を複数年にかけて実施し、現状の把握と移転先での有効活用を協議し進めた。調査の結果、所蔵品件数は芸術資料が約6,900点、買い上げ作品約1,200点（共に令和４年度末時点）となる。令和４年度までは研究所所轄の収蔵庫、学外倉庫、各専攻等での保管管理で対応を行ってきたが、移転後は美術工芸研究所が一括して収蔵品管理を行い円滑な芸術資料の活用を推進する。現校地に屋外設置している石彫買い上げ作品等に対しても各作品に対し現況調査を実施し、移転先での設置場所の検討と基礎工事を含む移動作業の準備を終えた。この件に関しては当該専攻の教員と研究所学芸員、一般学科の教員にも協力を仰ぎ進めてきた。本学が所蔵する美術品や教育資料は本学の歴史と共に受け継いできた資産である。新キャンパス移転後も継続的に収集、整備を実施し更なる充実を図っていく。

また新キャンパスでは「平成の百工比照」を常設展示するスペースを図書館・美術館棟内に新設する。金沢美術工芸大学では平成21年度より全国の工芸産地に息づく技法見本や工程見本、完成した製品、道具や材料などの諸資料の収集に着手した。この取り組みは、加賀藩５代藩主前田綱紀のもとで収集・整備・分類された工芸資料の一大標本「百工比照」（前田育徳会所蔵、国重文指定）にちなんで、「平成の百工比照」とする収集・作成事業である。これまでに陶磁、漆工、金工、染織の４分野を中心に約6,100点（令和３年度末時点）の資料を収集してきた。平成28年度からは4Kの高精細画質で制作工程を詳細に記録する映像資料の制作を行っており、これらの資料は後継者問題や消費の落ち込みなど工芸を取り巻く環境が楽観できない中にあっても、それぞれの産地でものづくりに携わる人びとの高い志と技術によって育まれてきた「今に生きる工芸」の姿を雄弁に語っている。令和４年度には平成の百工比照コレクションの海外に向けた発信の為、工芸技術記録映像のキャプションや解説について、技法の詳細にまで及ぶすべての英訳に取り組み、英語版の記録映像を完成させた。日本固有の工芸技術の英訳は容易ではなく、完成した資料は他に類を見ない貴重なものとなった。この事業は国立民族学博物館との連携協定に基づき、「平成の百工比照コレクションデータベースを基に、高等教育におけるデータベースの在り方、および活用手法について検証するとともに、社会連携事業と連動させることにより、高等教育教材の実用化を目的とする研究」を推進し、令和４年度は「平成の百工比照・文化資源としての意義とデータベースが開く可能性」と題して、コレクションの文化資源学的な意義とデータベース活用の可能性を解説した映像を作成し、本学の博物館学芸員課程で活用できる貴重な資料となった。新設される百工比照展示スペースでは資料映像が常時上映され、来場者が必要な資料を手に取って閲覧できる場として運営していく。

金沢美術工芸大学にとって大きな事業となる新キャンパス移転を踏まえ、美術工芸研究所の組織・実施体制等を検証・整備し、研究基盤の強化を図っていく。

美術工芸研究所所長　原　智

## 新キャンパス移転プロモーション展

展覧会名：「新キャンパス移転プロモーション展　教材としての芸術資料－金沢美術工芸大学所蔵の工芸優品選－」
（いしかわ百万石文化祭2023応援事業）
会期：2022年10月27日（木）～11月１日（火）
時間：午前10時～午後５時（最終日午後１時閉場）
観覧料：無料
場所：金沢市文化ホール　展示ギャラリー
主催：金沢美術工芸大学　後援：金沢市
入場者数：258人

金沢美術工芸大学は昭和21年（1946年）の開学以来、教育研究用の資料として、また、優れた芸術に接する機会を市民に提供するために、世界的に著名な芸術家の作品を含む約6,900点の作品を収集してきた。新キャンパスへの移転を控え、日々の“教材”として活用してきた芸術資料を身近に感じていただくため、学内ではなくまちなかで開催する“出開帳”として、令和２年度より移転プロモーション事業の一環と位置付けた展覧会を開催してきたが、今回がその最終章となる第三弾であった。本展では、本学所蔵の工芸品の中から古九谷や京焼の優品、加州刀と刀装具、加賀蒔絵や加賀象嵌の名工による粒ぞろいの作品に加え「平成の百工比照コレクション」の中から関連する資料や工程見本を展示した。

会期中は新型コロナウイルス感染症拡大防止に十分配慮し、来場者には連絡先の記入にご協力いただき、検温・手指消毒をおこなったうえでソーシャルディスタンスに配慮しながら鑑賞いただいた。

出展作品一覧

【金工】

中川 衛「加賀象嵌　重ね象嵌工程見本」（平成の百工比照コレクション）／初代兼若「刀　銘 越中守藤原高平元和八年正月日」／水野源六「秋草に虫図縁」「松枝文縁」「菊花文鐔」「獅子文鐔」「宝珠文様煙管」「鼻高面図目貫」「楽器尽図目貫」／水野源六「雛形木製見本箪笥」／鈴木長吉「銅製葡萄栗鼠図洋灯」／桐山直太郎「金象嵌蝶文花器」／水野源六「金銀銅製置物　図案」／水野源六「銅器花瓶　図案」／水野源六「金銀象嵌梅樹に尾長鶏図花瓶」／水野源六「金銀象嵌蘆双鶴図香炉」／山川孝次・八代水野源六「銅製鷹置物」／駒井「鉄地京都風景図象嵌香箪笥」／山田宗美「大根鼠置物」／高村豊周「朧銀花入 雨」

【漆工】

師池一貴「山中漆器 肉合研出蒔絵工程見本」（平成の百工比照コレクション）／二木成抱「草花蒔絵飾棚」／「市松文様蒔絵沈箱」／五十嵐派「松鶴岩波図蒔絵重香合」／五十嵐派「秋野蒔絵硯箱」／伝 清水九兵衛「蓬来山蒔絵鏡箱」／伝 清水九兵衛「大堰川図蒔絵硯箱」／「クリスチャンヴォルフ肖像図ブランケット」／「楼閣山水螺鈿煙草入れ」／初代 西村松逸「菊桐蒔絵中次」／大場松魚「平文椿平棗」／前 大峰「蕎麦の花に小禽沈金黒四方盆」／小松芳光「蒔絵木の間硯箱」

【陶磁・ガラス】

「九谷焼　九谷描画見本」（平成の百工比照コレクション）：古九谷 山中國盛・赤絵細描 福島武山・青粒 仲田錦玉・赤地金彩 高 明・染付 山本長左・薄絵 中村陶志人・上絵掻き落とし 工藤 武・釉裏金彩 吉田美統・庄三澤田富雄・呉須赤絵 藤原 元・盛絵 宮田和夫／古九谷「色絵岩に鳥図平鉢」／古九谷「青手葉蘭図平鉢」／富本憲吉「白磁壺」／富本憲吉「色絵丸紋散らし角箱」／北出塔次郎「呉須絵草果実文平皿」／北出塔次郎「色絵光風霽月飾壷」／野々村仁清「信楽広口水指」／尾形乾山「色絵椿文向付」／仁阿弥道八「銹絵瓢形鉢」／永楽保全「呉洲赤絵金襴手丸紋向付」／藤田喬平「飾筥 龍田」

【染織】

毎田健治・水野染工房「加賀友禅 手描友禅工程見本 友禅染め工程 松」（平成の百工比照コレクション）／毎田健治・水野染工房「加賀友禅 手描友禅工程見本 友禅染め工程 水鳥」（平成の百工比照コレクション）／古代裂今昔西村「友禅染 額 花ふきよせ」（平成の百工比照コレクション）／木村雨山「月光 衝立」

会場内展示風景

加賀藩では前田家の庇護のもと、江戸や京都から名工を招致して美術工芸が振興されたことがよく知られる。たとえば漆芸分野においては三代藩主の前田利常（1593～1658）が京都から招いた五十嵐道甫（？～1678）と江戸から招いた清水九兵衛（？～1688）によって加賀蒔絵の礎が築かれたが、その技法が後代によく継承されたことがうかがえる作品が、本学が所蔵する二木成抱「草花蒔絵飾棚」である。

明治17年（1884）金沢市に生まれた二木成抱は、五十嵐道甫や清水九兵衛といった名工に私淑して加賀蒔絵の技法を身につける。大正から昭和初期にかけて農商務省展や帝展へ入選を重ね、以降も新文展、日展を中心に活躍した。

本作は、中段を違い棚とした黒漆塗りの飾り棚である。右下の引戸に「成抱」の銘があるが、成抱以外の落款もみられるため、他にも協力者がいたと考えられている。引戸には加賀蒔絵の特徴でもある肉合研出蒔絵や高蒔絵を用いて流水、土坡、蛇籠、那木、椿が描かれて宇治橋の風景を表し、取手には蝶があしらわれる。蛇籠には沃懸地風の地に置平目、螺鈿や金銀の板金が用いられ、那木には大小の極込や切金、椿には高蒔絵に描割や付描をまじえ、華やかな意匠となっている。棚の天板に銀高蒔絵による双鷺図が、また中段には金薄肉高蒔絵による橋の情景があらわされるなど、加賀蒔絵の高度な技法を駆使して秋景が格調高く構成された優品で、この金沢の地で江戸期の五十嵐派の技芸が継承されつつ、芸術性の高い表現へと昇華された好例とみることができる。

二木成抱「草花蒔絵飾棚」金沢美術工芸大学蔵

二木成抱「草花蒔絵飾棚」（部分）

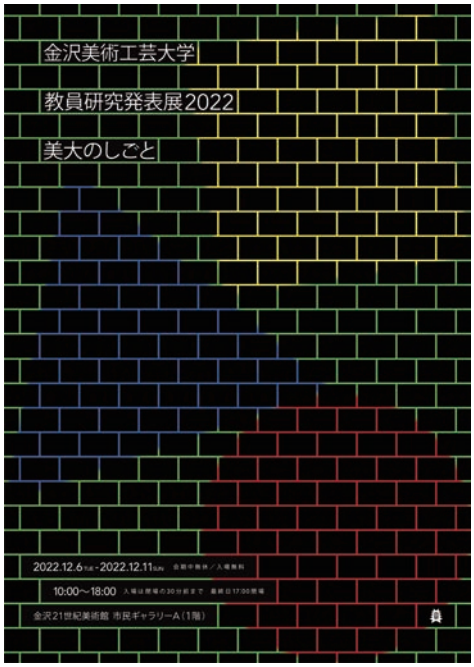
祖父である三代利常とならび、文化事業に注力したことで知られる五代藩主の綱紀（1643～1724）の時代には加賀藩御細工所が拡充整備され、さまざまな工芸技術の研鑽と領内の工芸品の増産に寄与した。綱紀が収集し自ら名付けたという「百工比照」（前田育徳会蔵・重要文化財）は、二千点以上にのぼる工芸資料を材質、用途、形態別に整理分類した工芸の一大標本で、本学の「平成の百工比照」事業はこれを現代に継承しようという取り組みである。そこで本展では、加賀藩が振興した工芸技術の高さをよく示す所蔵品とあわせ、「平成の百工比照コレクション」の中から関連する資料や工程見本も出品することとした。

師池一貴「山中漆器 肉合研出蒔絵工程見本」（平成の百工比照コレクション）金沢美術工芸大学蔵

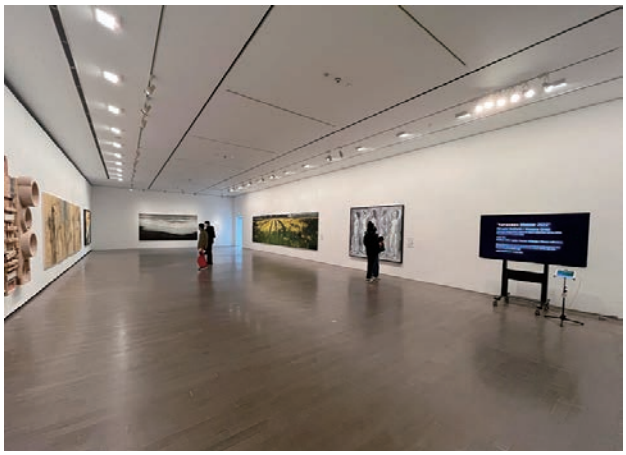
二木成抱の「草花蒔絵飾棚」にも用いられている「肉合研出蒔絵」とは、高蒔絵と研出蒔絵を併用した高度な技術で、加賀蒔絵に特徴的な技法である。本学の百工比照コレクションに含まれる肉合研出蒔絵の工程見本は図案の制作、置目から艶上げ仕上げにいたるまで全27工程からなり、重層的な蒔絵の制作工程が順を追って理解できる。本展においても工程見本をじっくりと鑑賞される方が多くみられた。すぐれた芸術作品に加え、教育や研究のための資料も多く揃っていることが本学の所蔵品の特徴である。さまざまな所蔵品を組み合わせて展示公開し、作品の魅力について鑑賞者により深く、より多面的に知っていただく一助となれば幸いである。

（在田　有里子／美術工芸研究所 学芸員）

## 教員研究発表展2022　美大のしごと




今年度の「金沢美術工芸大学　教員研究発表展2022－美大のしごと－」は、2022年12月６日から11日までの６日間にわたって金沢21世紀美術館市民ギャラリーＡにおいて開催された。展覧会に関する企画と準備は美術工芸研究所および附置機関である教育研究センターが主に担当している。



教員研究発表展は、本学の教員の日々の研究成果を公開するという目的で開催されている。芸術系大学である本学の教員の研究とは、美術・工芸・デザイン等芸術に関する知見の集積だけではなく、知見を基にした制作による新たな芸術表現の発表に及ぶ。したがって、優れた作家である本学の教員による日々の研究成果が、作品として発表・公開される。また、理論研究や調査研究など、学術研究のスタイルで研究を行う教員の研究成果も同時に発表・公開されている。いずれのスタイルであれ、芸術におけるそれぞれの進歩・進展の発表であり、現代芸術の最先端として未来を切り開くその様子を見ることができる。

ここ数年にわたり、新型コロナウイルス下における行動制限が続く中、展覧会のあり方についても教育研究センターにおいて多々議論がなされた。その中で、この展示が社会の信託を得て教育・研究活動を行うわれわれ教員と大学にとって、重要な社会的還元であることの重みが第一に感じられた。この意識を基礎として、多くの市民にその成果を十分に示すため、最大限の努力を払った。

今回展示された作品は計31点、参加教員数は33名であった。内容としては美術科教員による絵画・彫刻作品やメディア表現作品と研究活動の展示。デザイン科教員による作品および研究活動の展示、工芸科教員による工芸作品展示が行われた。また開幕初日には昨年同様出展した教員によるギャラリートークが行われ、各教員による作品解説が行われた。

展示計画と会場構成についてはセンターの西本准教授が主として担当し、多岐にわたる展示内容を適切に、そして機能的に展示すべく設営いただいた。それぞれの展示には作品のタイトルや解説を行う表示がなされ、また同時に出展した各教員の紹介も表示された。これは単に展示内容を伝えるというだけでなく、研究・教育機関として本学がどのようなリソース（資源）をもっており、社会に対してそのリソースを提供可能かということを知っていただくためのものでもあった。

展覧会の開催を周知するため、今年もポスター・フライヤーを作成し配布した。作成についてはこのところ学生に依頼を行っている。今年はセンターの樺島講師に監修の任をとっていただき、デザイン科視覚デザイン専攻４年の田嶋千寛さんが制作を行った。現キャンパスの校舎のタイル壁をモチーフにデザインされたポスター・フライヤーは、来年度にキャンパス移転を控え、現キャンパスでの最後の展示となる今回を象徴するにふさわしいものとなっており、本学の歴史と本展の趣旨をよく表現したものとなった。

今年は会期が６日間と短く、また新たな感染拡大のフェーズにさしかかったこともあり来場者の出足が懸念されたものの、最終の来場者数は3,871名にのぼり、多くの方に研究成果を見ていただくことができた。この成功は展覧会担当として尽力いただいた先生方にもまして、展示計画や広報、そして多数に及ぶ連絡調整や管理において文字通り八面六臂の仕事を果たして頂いた、研究所の在田学芸員を中心としたスタッフの活躍に負うところが大きい、この場を借りて改めての感謝を申し上げるところである。

さて、先述の通り来年度にはキャンパス移転となり、本展についても学内での開催等さまざまな可能性が考えられる。センター内でも今後検討を行う予定であるが、移転後の整備などの必要もあり、来年度の教員研究発表展については、今年度と同様の時期に21世紀美術館での開催を予定している。改めて、われわれ教員の成果を上梓し、社会に対して応えていきたいと考えている。

（教育研究センター長　　荷方　邦夫）

## 美術工芸研究所ギャラリー

■収蔵作品展－近現代の絵画・彫刻－

本学は開学以来、教育・研究の一環として、美術や工芸、デザイン等の各分野において、歴史的評価が高く、かつ広く市民の共有財産としての価値を有する芸術資料を収集している。

本展は本学名誉教授で令和３年に逝去した石田康夫の作品「座像」（令和３年度寄贈）とともに、本学収蔵品から近現代の絵画および彫刻の優品を展示紹介した。石田は現在の美術科彫刻専攻の前身である金沢美術工芸短期大学彫塑専攻を1955年に卒業、1957年に研究科を修了し、1965年以降は助手を経て彫刻専攻講師、1999年の退官まで同専攻の教授を務めた。教員生活と並行して日展を中心に作品を発表、第３回改組日展で特選を受賞するなど作家として早くから頭角をあらわした。「座像」は左膝を立て座するブロンズの裸婦像で、石田が 50 歳の頃に制作し同年に現代美術展に出品された秀作である。ごく自然で柔らかく有機的な身体のフォルムからは、石田の作品の特長である豊かな量感や造形性を窺い知ることができる。本作は人体塑像の授業や具象的表現に取り組む学生の指導など、教材としても有用な作品である。本学の学生であり教官であった石田の作品を賜ったことに深く感謝し、今後も学内外で作品の普及に努めたい。

また本展では、本学の草創期であった1950年前後に油画専攻で教鞭を執った小絲源太郎や高光一也、宮本三郎の油彩画や、宮本と師弟関係であり本学を卒業した鴨居玲[*1]の油彩画、彫刻専攻にて教鞭を執った長谷川八十や柳原義達、そして柳原と師弟関係であり同じく本学教官であった清水良治の作品を相対して展示した。かつての教員たちの秀作を通じて、金沢市出羽町の旧校舎から現校舎、そして2023年10月に移転予定の新校舎へと移り動く本学の変遷を辿る展覧会となった。

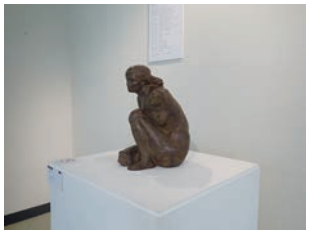
*1　1984年に非常勤講師として実習指導を担当

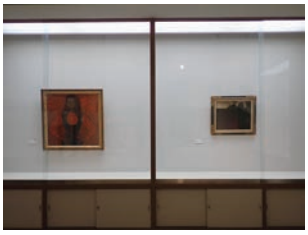
○開催期間：2022年４月８日（金）～５月27日（金）
　　計31日間

○入場者数：159名

○出展一覧

小絲源太郎「一目千本」1961年（油彩）／高光一也「南仏風景」1955年（油彩）／宮本三郎「赤い服」1962年（油彩）／鴨居玲「Bar」1968年（油彩）／木村忠太「カンヌの夕暮れ」1974年（油彩）／藤本東一良「ドーヴィルのヨットハーバー」1975年（油彩）／柳原義達「黒人の女」1956年頃（彫刻）「裸婦」1986年（素描）「人物」1991年（素描）／長谷川八十「闘鶏」1970年頃（彫刻）／清水良治「タイトル不詳」（女性像および男性像）制作年不詳（彫刻）／石田康夫「座像」1984年（彫刻）／ヘンリー・ムア「Half figure」1952年（彫刻）　以上11名（14点）





■卒業修了制作買上作品セレクション2022

本学では、学部および大学院の卒業・修了制作と論文の中から優秀な作品を選考して購入する買上制度を通じて、開学間もない昭和24年以来、1,200点[*2]を超える作品を収集してきた。卒業・修了制作は学生にとっては在学中の研鑽の賜物であり、また教職員にとっては本学の教育研究の成果としても意義深いものといえるが、約70年間にわたる買上作品の蓄積を美術史的観点からみれば、その当時の芸術動向を如実に反映する歴史的資料としても貴重である。

2017年４月に図書館棟２階に美術工芸研究所ギャラリーが開設されて以降、美術工芸研究所では近年の買上作品を中心に公開展示を行っている。通算５回目となる本年は13名を取り上げて開幕した。会期中には３年ぶりとなる対面でのオープンキャンパスが開催され、本展にも多くの来場者が訪れ熱心に鑑賞する姿が見られた。現校舎で行う買上作品の展覧会は本展が最後であり、日々学生が研鑽を積んだ学舎を去ることはなごり惜しくもあるが、移転予定の新校舎に新設される美術館や展示スペースを活用し、現校舎では施設の機能上、展示が困難であった多種多様の買上作品の公開にも取り組みたい。

*2　令和４年度末時点

○開催期間：2022年６月13日（月）～７月29日（金）
　　計36日間

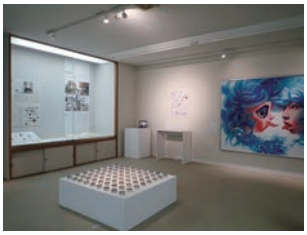
○入場者数：482名

○出展一覧

【学部】堤千春「私との交信求めて」（油画専攻）／岡田真由美「この星の欠片、海の蓋をあけること」（彫刻専攻）／新留璃子「「恩物」を通して見る20世紀前半の芸術表現―日本におけるフレーベル思想の受容と文化への影響を中心として―」（芸術学専攻）／松尾龍成「ZeLOST 85s 根がかりによるルアーロスト０を目指した針内蔵型ルアー」（製品デザイン専攻）／大塚ゆり「Asobiba場所性×身体性を生かした新しい舞台鑑賞のかたち」（環境デザイン専攻）／佐藤綾乃「気吹」（工芸科鋳金コース）

【修士課程】南野和「庭」（絵画専攻日本画コース）／桜井旭「The disappearing city Ⅷ」（絵画専攻油画コース）／林蓉子「Kogei－冊子提案と、実践を通じて習得した組版技法の展示－」（デザイン専攻視覚デザインコース）／都筑尭志「音楽のユーザーインターフェース」（デザイン専攻製品デザインコース）／祝阿冬「Requiem」（工芸専攻染織コース）

【博士後期課程】金保洋「積彩の生成　2019-Ⅰ」（工芸研究領域＜漆芸＞）／翁欣羽「溶雪菜園」（工芸研究領域＜漆芸＞）　以上13名（13点）



（頓宮　佑佳／美術工芸研究所 学芸員）

## 美術工芸研究所ギャラリー

■平成の百工比照－令和時代の収集と展開－

金沢市は平成21年にユネスコ創造都市（クラフト＆フォークアート分野）の認定を受けた。本学は同年より金沢市と協働で「平成の百工比照収集作成事業」に着手し、漆工・金工・陶磁・染織の分野ごとに、全国の産地から今日の工芸の材料に関わる見本や道具類、技法の工程見本、完成した製品などを収集してきた。コレクションはすでに6,000点を超えるが、令和の時代に入った現在も収集を継続しており、本展ではその内容を紹介した。

近年はこれまで収集できていなかった産地の製品や、技法の理解を深めるための工程見本資料の拡充に努めている。一例を挙げれば、江戸時代に新潟県村上市で確立され、昭和30年２月に「新潟県文化財」、昭和51年２月には国の「伝統的工芸品」の指定を受けている「村上木彫堆朱」について、代表的な塗り方である堆朱の工程見本をすでに収集していたが、令和３年度には新たに堆黒、朱溜塗、色漆塗、金磨塗、三彩彫を含む工程見本を収集した。産地において新たに生み出された技法も含めて現在の村上木彫堆朱の技法６種が網羅されたこととなり、より体系的な標本として活用が期待される。

村上木彫堆朱の工程見本

本展では資料の収集と情報の公開を事業の両輪と捉え、国内外への情報発信に関する取り組みも紹介した。例えば、本学では平成28年度から31年度にかけて「工芸技術記録」の映像制作に取り組んだ。肉合研出蒔絵、加賀友禅、九谷焼、加賀象嵌の技法を高精細の4K画質で記録撮影し、使用する道具や手順の解説も交えながら、制作者の手の動きや作業音までもつぶさに捉えた映像となっている。これらの映像は鑑賞者が工芸技法について知識を深めるにあたり視覚的に分かりやすく、美術工芸研究所ギャラリーで公開活用されてきたが、専門用語が多く含まれることから日本語を母語としない鑑賞者にとっては十分な理解が難しいおそれがあった。本学では国際的な情報発信を見据えて令和２年度から３年度にかけて英語字幕への対応に取り組み、本展ではこの成果を初公開した。

令和３年３月には国立民族学博物館との連携協定を締結し、同館との連携により「平成の百工比照データベース」が整備された。タッチパネル式の資料検索システムを用いてコレクションを都道府県別や分野別に検索すると、収納箱の番号、資料の画像、解説文などの情報を大型モニターに表示することができる。さらに連携事業の一環として令和３年度から３カ年計画で、コレクションの意義を博物館学の観点から紹介する高等教育映像の制作に着手している。本学学生向けの講義をはじめ、生涯学習講座などにおける活用も期待される。

新キャンパスでは、鑑賞者がより主体的に「平成の百工比照コレクション」の資料や映像を利用することができるよう、専用のコーナーが整備される見込みである。今後とも資料の収集整理と展示公開に努めるとともに、国内外への情報発信とさらなるコレクションの活用に向け、準備を進めたい。

「平成の百工比照」工芸技術記録映像を活用した展示の様子

「平成の百工比照データベース」および「高等教育映像シリーズ『平成の百工比照』」を活用した展示の様子

○開催期間：2022年10月３日（月）～12月23日（金）
　　計56日間
○入場者数：236名
○出展作品数：307点
下記の資料映像６編を会場内で上映
・「平成の百工比照」工芸技術記録
　肉合研出蒔絵　／　加賀友禅　／　九谷焼　／　加賀象嵌
・高等教育映像シリーズ「平成の百工比照」
　令和３年度制作：「平成の百工比照　金沢が進める日本の工芸技術継承プロジェクトの背景」
　令和４年度制作：「平成の百工比照　文化資源としての意義とデータベースが開く可能性」

（在田　有里子／美術工芸研究所 学芸員）

## 柳宗理記念デザイン研究所

本研究所では昨年度に引き続き、今年度も新型コロナウイルス感染症対策を講じた上で各事業を展開した。今後も適切な対策のもと、展示活動ならびに教育普及の機会の拡大に努めたい。

1．調査

（1）経常的調査

柳宗理の執筆、言及論文と発表歴に関する資料およびデータの整理を継続した。

2．展示

（1）常設展示（展示資料室1）

柳宗理がデザインした製品のうち現在も販売されているものを中心に約200点を常設展示している。実際の製品を展示・公開し、さらには各メーカーの製品が一堂に会している点において、来場者の好評を得ている。

（2）企画展示（展示資料室2）

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、主催企画展示の開催を見送ることとした。

3．講演会

本研究所では柳宗理に関する話題だけではなく、広くデザイン文化の発信とコミュニケーションの新たな接点となるべく不定期にオンライン講演会を配信している。

【OnLine講演会002】「金沢美術工芸大学・工業デザインの誕生と柳宗理先生」

・講師：酒井和平（本学名誉教授）

https://www.youtube.com/channel/UCuMtTM_Oosvl3Ff3hnWgvWA

4．教育普及

（1）大学との連携

【デザイン科新入生ガイダンス】

昨年度に引き続き、本学デザイン科と連携して同科の新入生を対象にガイダンスを行った。

・日程および参加人数：2022年4月19日（視覚D 学生22名、教員1名）、4月20日（環境D 学生20名、教員1名）、4月22日（製品D 学生21名、教員1名）

【展示資料室2の利用】

①「ボトル展－ペットボトルに代わる陶磁ボトルと新しい飲料提供の提案－」

・会期：2022年6月18日～6月30日

・入場者数：351名

・概要：本学製品デザイン専攻4年生と工芸専攻3年生による「製品デザイン演習（四）」「工芸演習（三）陶磁」の合同授業成果発表展示

②「リノベ展」

・会期：2022年8月6日～8月9日

・入場者数：127名

・概要：本学環境デザイン専攻3年生による「環境デザイン演習（三）」の授業成果発表展示

③「これからのヘアーセットの時間のデザイン」

・会期：2022年10月7日～10月12日

・入場者数：383名

・概要：本学製品デザイン専攻2年生による「製品デザイン演習（二）」の授業成果発表展示

④「片手で使えるデザイン展」

・会期：2022年12月16日～12月22日

・入場者数：166名

・概要：本学製品デザイン専攻2年生による「製品デザイン演習（二）」の授業成果発表展示

デザイン科新入生ガイダンス

①展示風景

（2）団体見学（2022年4月～、本学学生以外）

| | | |
|---|---|---|
| ・7月13日 | 愛知県立芸術大学 | 11名 |
| ・7月15日 | 筑波大学 | 12名 |
| ・8月24日 | 嵯峨美術大学 | 13名 |

（佐々木　千嘉／柳宗理記念デザイン研究所 事務職員）

**令和４年度収集美術資料一覧**

| ■寄附資料 | ■制作年 | ■作者名等 | ■分類 | ■寸法・素材 |
|---|---|---|---|---|
| 水野家　金工作品12点および<br>古文書資料一式 | 江戸期～昭和期 | 水野源六家 | 工芸 | ブロンズ、銀、胴など<br>鋳金、象嵌など |
| 和田誠氏　制作のポスター　135点 | 1950年代～2018年 | 和田　誠 | 広告デザイン | － |
| 城端梅蒔絵平棗　１点 | 2001年 | 村田百川 | 漆芸 | 径86㎜　高61㎜<br>木胎、漆など<br>城端蒔絵、金梨地など |
| 森嘉紀氏　旧蔵資料一式 | 昭和期 | － | デザイン（教育資料） | － |

| ■学生買上作品 |
|---|
| KANABIクリエイティブ賞2022　学長賞　17名（17件） |

**令和４年度所蔵作品活用実績**

【貸与件数】

・学内利用（貸与・特別利用含）　26件
・学外利用（貸与）　２件（８点）
・学外特別利用件数（画像利用等）　11件（90点）
・学外卒業買上作品利用（貸与･特別利用含）　３件（４点）
・市内各所貸与（年度更新）　24か所（68点）

※令和５年２月末集計
※本学主催の企画展等への出品および本学寄託資料の利用を除く

【美術工芸研究所ギャラリー開室状況】

・開室時間　月～金曜日：10時～17時
・休室日　土曜日、日曜日、祝祭日、夏季･春季休業期間、年末年始、入学試験期間など
・入場料　無料
・開室日数　123日
・入場者数　877名

まちなかギャラリー事業

【令和４年度 金沢美術工芸大学大学院 博士後期課程 １年研究制作展「PIN」】

・会期　令和５年２月17日（金）～２月23日（木）
・会場　石川県政記念しいのき迎賓館　ギャラリーＡ・Ｂ
・主催　金沢美術工芸大学
・共催　石川県政記念しいのき迎賓館
・後援　金沢市、北國新聞社
・出展者　伊藤 真里奈（油画）、桜井 旭（油画）
　蒋　先財（漆芸）、宋　芸（陶磁）
　張　思藝（漆芸）、南野　和（日本画）
　羅　婧瑄（陶磁）、劉　方璐（陶磁）
・入場者数　606人

| | |
|---|---|
| 研究所運営会議 | ／原　智（研究所長、工芸）、保井亜弓（美術工芸研究所（兼）芸術学）、水野さや（美術工芸研究所（兼）芸術学）、寺井剛敏（視覚デザイン）、荷方邦夫（教育研究センター長、一般教育等）、渋谷拓（一般教育等） |
| 教育研究センター | ／荷方邦夫（教育研究センター長、一般教育等）、石崎誠和（日本画）、鈴木浩之（油画）、津田道子（彫刻）、水野さや（美術工芸研究所（兼）芸術学）、樺島　脩（視覚デザイン）、西本耕喜（環境デザイン）、青木千絵（工芸） |
| 美術工芸研究所 | ／所長：原　智（工芸）、保井亜弓（（兼）芸術学）、水野さや（（兼）芸術学） |
| 柳宗理記念デザイン研究所 | ／所長：寺井剛敏（視覚デザイン） |